



上廣死生学・応用倫理講座
特任教授

会田 薫子

About Us

上廣死生学・応用倫理講座は東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター内におかれた寄附講座です。公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体としています。本講座は2007年度に開設され、臨床死生学および臨床倫理やケア倫理、生命倫理等の応用倫理を担当領域として、研究と教育および実践活動を進めています。

2026年度はこれまでの3期15年間の実績を踏まえ、第4期の5年目に入りました。今年度も一層の研究展開と社会貢献を進めてまいります。

死生学は単に「死について」の学ではなく、死を生に伴い、また生が伴うものとして、「死生」を一体として考え、人間が死生をどう理解し対処してきたかについて、人文知を背景に広く考えようとしています。その意味で東京大学の死生学研究は2002年以来、死生学を“thanatology（死の学問）”というよりも“death and life studies”として捉え、人文社会系を中心とする学際的な研究プロジェクトを進めてまいりました。

本講座の活動は死生学の中核領域である臨床死生学と臨床倫理の研究・教育と実践活動を軸にしております。臨床死生学は臨床現場で実践の知としてはたらく学問です。医療機関や介護施設、在宅医療・介護の場などの医療とケアの現場において、死生をめぐる諸問題に関し、患者/利用者本人と家族等および医療とケアに携わる人々のニーズに応え、死生学が得た知見を医療とケアに活かすことができるようなかたちにして提供しようとしています。その際、判断の土台となる医学的な新知見も適宜取り入れます。

臨床倫理は臨床現場において、ひとりひとりの治療やケアや療養場所などの選択に際し、本人を人として尊重する意思決定の実現を目指します。その実践的研究の成果は医療・ケアの臨床現場に浸透しつつあり、高齢者医療・ケアの領域などで実績をあげてきました。

このように、上廣死生学・応用倫理講座は文理融合の知を創出しつつ、死生学・応用倫理センターのメンバーの協力も得て、バランスのよい研究・教育・実践活動の展開を目指しています。

臨床倫理検討シートは、以下のサイトからダウンロードできます。

Activities 01

臨床倫理プロジェクト

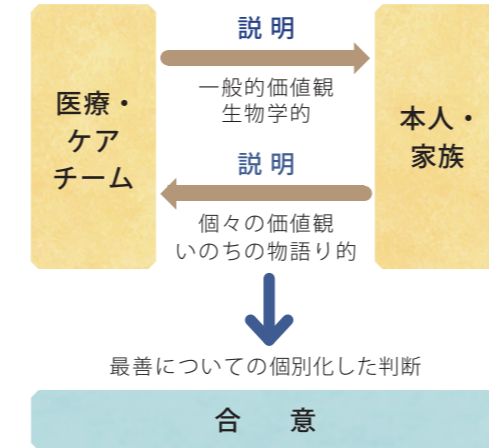
本講座のおもな研究・実践活動の1つは《臨床倫理プロジェクト》です。「臨床倫理」は、医療・介護の現場で、医療・ケア従事者たちが、患者/利用者本人や家族と応対しながら医療・ケアを進めて行く際に起きる諸問題について「どうするのがよいか」を、本人を中心に考える営みです。本プロジェクトは次の3点をおもに目指しています。

- 日本社会の文化に合った臨床倫理の考え方や検討の方法を見出し、それを普遍的に理解できる言葉で表現すること。これまでの研究成果である、「カンファレンス用ワークシート」などの臨床倫理検討シートを用いた事例検討の演習を、全国各地で行っている臨床倫理セミナーに組み込み、現場における実装を目指すこと
- 現場の医療・ケア従事者との協働で実践的研究を進め、医療・ケアの質の向上、今後の医療・ケアの望ましいあり方の実現に寄与すること
- 医療・ケアの現場で死生の問題をどう考えるべきかという臨床死生学の課題を臨床倫理的に検討すること。それによって新しい時代の看取り文化の創成に貢献すること

本プロジェクトの基本的なコンセプト

●意思決定プロセスの「情報共有-合意」モデル

医療・ケアを提供する側が有する情報と医療・ケアを受ける本人・家族側が有する本人の生活と人生に関する情報を互いに提供して共有することをベースにしつつ、コミュニケーションを通して合意形成を目指します。これは清水哲郎前特任教授を中心に、国内の医療・ケア従事者と30年にわたる協働によって開発された、国内独自開発の共同意思決定(SDM: shared decision-making)のモデルです。



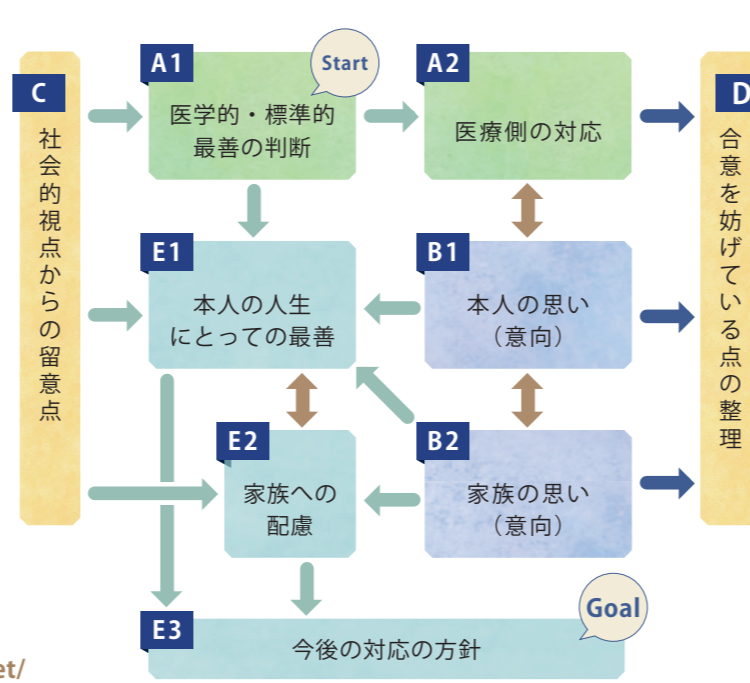
●生命の二重の見方

私たちのいのちには、生物学の対象になる身体的生命という相と、自分のいのちの物語りを創りつつ一歩一歩進む人生という相があります。身体が支えてくれなければ、人生は展開できません。ですから、人生を豊かに展開するために、生命を整える必要があるのです。

臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成研修の開催

「臨床倫理プロジェクト」の活動として、全国各地で医療・ケア従事者のための臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成講座を開催し、基本的な考え方のレクチャーと事例検討の演習を行ってきました。2020～2022年度はコロナ禍のなか対面研修を制限する一方、e-learningコンテンツを公開し、リモート研修も実施しました。2026年度はリモート研修の継続とともに対面研修の再拡大を目指します。右記は事例検討の演習で使用している臨床倫理検討シート(カンファレンス用ワークシート)です。検討シートを用いて分析する臨床倫理の方法は、『臨床倫理の考え方と実践—医療・ケアチームのための事例検討法』(東京大学出版会、2022)に記述しました。同書については本リーフレットの裏面もご参照ください。臨床倫理検討シートは、以下のサイトからダウンロードできます。

<http://clinicalethics.ne.jp/cleth-prj/worksheet/>



Activities 02

意思決定支援ツールの開発と死生に関する思想的・倫理的研究

医学・医療が目指してきた生存期間の延長は寿命革命につながりました。他方、さまざまな加齢変化を抱えながら最期へ向かう過程において、医療のためにかえって本人の苦痛が増す場面もみられるようになりました。多くの人にとって人生は長くなりましたが、老衰の進んだ超高齢者に負担となる医療行為が行われることも多くなりました。私たちはこのジレンマにどう対応すべきでしょうか。本講座ではこの課題に関して、さまざまな取り組みを行ってきました。その成果として、まず、日本老年医学会「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給の導入を中心として」(2012)への参画が挙げられます。次いで、この課題を本人と家族らの視点から捉えて意思決定を支援するため、『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』(2013)、『高齢者ケアと人工透析を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』(2015)を出版しました。いずれも本人・家族らと医療・ケア従事者間の共同意思決定(shared decision-making/SDM)を支援するためのツールです。また、RISTEXのプロジェクトとして、高齢者が最期まで自分らしく生きることを支援するための『心積もりノート』(2015)を開発し、frailty研究の知見を取り入れ改訂版(2018)を発行しました。さらに、日本老年医学会「ACP推進に関する提言」(2019)と「新型コロナウイルス感染症流行期において高齢者が最善の医療およびケアを受けるための提言」(2020)、「立場表明2025」にも、本講座の研究成果が活かされています。また、AMED研究課題2件(柏原直樹、三浦久幸、2022)と厚生労働科研の研究課題(三浦久幸、2024)においても意思決定支援ツールの制作に携わらせて頂きました。さらに本講座では、臨床実践を下支えする多角的な思想的・倫理的研究を行い、その成果を社会に還元しています。その一つが本講座の協力教員も執筆に加わった『医療・介護のための死生学入門』(2017)です。また野瀬彰子特任研究員は、物とは区別されるものとしてのわれわれの精神や生命について論じたベルクソンの哲学の研究を通して、自由と生命をめぐる哲学的・倫理学的問題を考察しています。富岡薫研究員は、専門とする「ケアの倫理」がフェミニスト理論であることを踏まえ、ジェンダー等多角的観点から生命倫理の問題を捉え直すことを試んでいます。小原優吉研究員は、様々な理論的立場の調停を試みたヘーゲルの哲学の研究を通じて、異なる背景的理解を持つ人々が互いに承認しあうことができるのかという倫理学的な問題に取り組んでいます。



Activities 03

学生教育・リカレント教育

臨床倫理プロジェクトの研究成果を社会に還元する活動に力を入れています。社会還元と同時に、研究成果が臨床現場において実際に有効かどうかを確認し、さらに改善しようとする実践的研究でもあります。

《東京大学文学部・大学院人文社会系研究科における教育活動》

死生学・応用倫理センターは部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」を提供しています。これは全学に開かれたものであり、一定の単位を取得すると卒業時に修了証が交付されます。本講座教員は「死生学概論」、「応用倫理概論」を含め、数多くの科目を担当しています。

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース

臨床現場で働く方たちが死生についてどのように理解し、どのように医療とケアに活かしていくかを研鑽していただくための活動です。毎年、死生学セミナーとレポート書き方セミナー、およびエンドオブライフ・ケアをテーマとする春季シンポジウムなどを行っています。2025年度末の春季シンポジウムは「認知症を有する人のためのエンドオブライフ・ケア—Comfort Feedingを目指して」をテーマとしてオンライン開催し、1600名以上の方々に参加申し込みをいただきました。さらに、本コースの単位として認定する下記の研究会を行っています。受講者は所定の単位を取得し、修了レポートを提出すると、審査を経て修了が認定されます。

臨床死生学・倫理学研究会

水曜日の夜間に年10回程度開催しています。死生の問題に関わる分野の方に発表をしていただき、参加者がディスカッションする研究会です。第一線の臨床家や研究者の講演の他、死生に関わる市民の活動、若手研究者の意欲的な研究など、さまざまな場面からテーマを選んでいます。2025年度はオンラインで10回開催し、延べ4,058名の方々にご参加いただきました。2026年度もオンライン開催を継続します。

2025年度のテーマと講演者(敬称略)

4月23日	「『成人肺炎診療ガイドライン2024』の意義」 小宮 幸作(大分大学医学部呼吸器・感染症内科学講座教授)
5月14日	「チーム医療と臨床倫理—臨床倫理プログラムの実装」 清水 千佳子(国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センターがん総合診療センターセンター長 乳腺・腫瘍内科医長/診療科長)
5月28日	「過疎地域で暮らす人を支えるために～生きかた・活きかた・逝きかた～」 阿部 智介(医療法人慈孝会 七山診療所 所長)
6月11日	「腹膜透析患者のpeer-to-peer ネットワークがもつ力」 北村 温美(大阪大学医学部付属病院 中央クオリティマネジメント部 副部長、DEI-イニシアティブ、腎臓内科)
7月2日	「ACPと切っても切れないお金の話」 福村 雄一(司法書士法人福村事務所代表司法書士、大阪大プロジェクト代表者)
10月15日	「医療における自己決定権の意味—法律家の視点から」 竹口 文博(東京医科大学 総合管理室長・腎臓内科客員准教授、弁護士)
11月5日	「共に紡ぐ物語とナラティブブック秋田～患者の「物語」と「語り」の共有による医療～」 伊藤 伸一(秋田県医師会副会長、伊藤医院院長)
11月19日	「エナジーサイクルを回せ!—在宅看護実習記—」 亀井 紗織(株式会社 ナースエナジー 代表取締役、実務教育学修士・看護師/介護支援専門員)
12月3日	「2つのリスクに備えるために～自然災害と社会構造変化の津波～」 神野 正博(社会医療法人財団蓮山会 恵寿総合病院 理事長)
12月17日	「倫理的な組織文化とはなにか—医療の組織の中でのあたりまえと倫理」 勝山 貴美子(横浜市立大学大学院 医学研究科看護管理学分野 教授)



左から、一ノ瀬 龍、新里 優太、冨岡 薫、会田 薫子、野瀬 彰子、小原 優吉

- 2002～2006年度……東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀 COE「死生学の構築」(リーダー 島國進教授)
- 2007～2011年度……同 グローバル COE「死生学の展開と組織化」
- 2007年度……上廣死生学講座発足 特任教授 清水哲郎 特任講師 山崎浩司 (総括監督者 島國進教授) (東京大学の死生学研究を強化すべく、公益財団法人上廣倫理財団の寄付金により設置)
- 2011年度……死生学・応用倫理センター発足 (センター長 池澤優教授) 山崎浩司特任講師は信州大学に准教授として転出
- 2012年度……死上廣死生学・応用倫理講座 (上廣死生学講座の改組、拡充) 特任教授 清水哲郎 特任准教授 会田薫子 (総括監督者 榊原哲也教授)
- 2013年度……死生学・応用倫理センターに堀江宗正准教授着任。上廣講座に特任研究員3名着任 早川正祐特任研究員は同年度末に三重県立看護大学に准教授として転出
- 2014年度……園増文特任研究員は東北大学に助教として転出、宮村悠介特任研究員は愛知教育大学に助教として転出
- 2015年度……上廣講座に特任研究員2名 (山本栄美子、田村未希) 着任
- 2016年度……清水哲郎特任教授が岩手保健医療大学に学長として転出
- 2017年度……上廣講座第3期開始 特任教授 会田薫子 特任准教授 早川正祐
- 2018年度……死生学・応用倫理センターに小松美彦教授着任
- 2020年度……上廣講座に特任研究員1名 (坂井愛理) 着任
- 2021年度……死生学・応用倫理センターに鈴木晃仁教授着任
- 2022年度……上廣講座第4期開始 特任教授 会田薫子 特任准教授 早川正祐
- 2023年度……上廣講座に特任研究員1名 (野瀬彰子) 着任 坂井愛理特任研究員は追手門学院大学に専任講師として転出
- 2024年度……上廣講座に特任研究員2名 (西岡千尋・冨岡薫) 着任 田村未希特任助教が国際基督教大学に助教として転出 西岡千尋特任研究員は京都大学に特定研究員として転出 (学振 PD)
- 2025年度……上廣講座に特任研究員1名 (小原優吉) 着任 早川正祐特任准教授が京都大学に准教授として転出

東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座

Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 法文2号館3階25号室
Rm. 25, Bldg. Hobun No.2, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan Tel & Fax: 03-5841-2656
e-mail: dalsjp@l.u-tokyo.ac.jp <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls>

■ 会田 薫子 (あいた かおるこ) 特任教授
略 歴 東京大学大学院医学系研究科健康科学専攻博士課程修了(保健学博士)。ハーバード大学メディカル・スクール医療倫理プログラムフェロー、上廣死生学・応用倫理講座特任准教授を経て現職。
専 門 臨床倫理、医療倫理、看護倫理、臨床死生学
主 要 著 書 『ACPの考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』(東京大学出版会、編著)、『臨床倫理の考え方と実践—医療・ケアチームのための事例検討法』(東京大学出版会、共編著)、『長寿時代の医療・ケア—エンドオブライフの倫理と倫理』(ちくま新書)、『医療・介護のための死生学入門』(東京大学出版会、共編著)、『延命医療と臨床現場：人工呼吸器と胃ろうの医療倫理学』(東京大学出版会)等。

■ 野瀬 彰子 (のせあきこ) 特任研究員
専 門 哲学
人間的な側面とともに自然的・社会的な側面をもつ人間の多層的な理解と他者との対話・関わり合いを生かした意思決定支援がいかにして可能か考える手がかりを、ベルクソンの自由論の発展的研究および後期の生命論の研究から取り出すことを試みしています

■ 冨岡 薫 (とみおかかおる) 特任研究員
専 門 倫理学
人間は相互依存する存在であるという人間観のもとで、ケアを中心とする社会構築に向けて、倫理学的観点から概念や理論の分析を行っています。特に、ケアの倫理がフェミニズムに根ざしていることを踏まえ、ジェンダー等のさまざまな属性の交差性に着目しながら研究をしています。

■ 小原 優吉 (おはら ゆうきち) 特任研究員
専 門 倫理学
私たちはときどき、「自分は何ををしたいのか」「何をすべきなのか」ということを見失ってしまうことがあります。こうした自分を根拠から揺り動かすような問いに対して、私たちは自らの歴史を物語ることを通じて自分が何者であるのかを再確認し、それを他人に伝えていくことができます。このような自己理解や相互承認に対する歴史の意義について、ヘーゲルの哲学を通じて研究しています。

教務補佐員 ■ 新里 優太、一ノ瀬 龍

協力教員

■ 納富 信留 (のうとみのぶる) 教授 (哲学専門分野)、死生学・応用倫理センター長
専 門 西洋古代哲学
哲学の起源となった古代ギリシア哲学を研究しており、生と死、魂の問題が大きなテーマです。また、世界哲学の視座から多様な哲学伝統を検討しています。

■ 堀江 宗正 (ほりえのりちか) 教授 (死生学応用倫理専門分野) 死生学・応用倫理センター主任
専 門 死生学、宗教学
現代のスピリチュアリティ、死生観、サステイナビリティの研究を専門としています。海外の死生学者と協働しながら質問紙を用いた死生観調査をおこなっています。

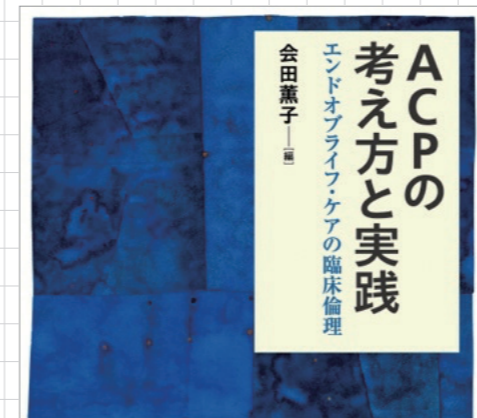
■ 鈴木 晃仁 (すずきあきひと) 教授 (死生学応用倫理専門分野) 死生学・応用倫理センター
専 門 医学史
精神医療の歴史と感染症の歴史が専門になります。医師や医療関係者の視点と、疾病の視点、患者の視点の三者を組み合わせることを目標にしています。

死生学・応用倫理センター 特任研究員

■ 孫 婧 (SUN JING/ソンセイ) 特任研究員
専 門 医学史、食の歴史、日本史
日本及び東アジアにおける栄養学と食の歴史が専門です。栄養と食の視角から医療・政治・経済の連動を考察する学際的な研究を目指しています。

■ 江川 純一 (えがわじゅんいち) 特任研究員
専 門 宗教学・宗教史学、イタリア史
専門は近現代イタリアにおける宗教と宗教研究です。また、フランスの『社会学年報』派における死をめぐる言説の研究を行っています。

ACPの考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理



ひとりひとりを尊重する医療・ケアのために
アメリカなどを発祥とするACP(アドバンス・ケア・プランニング)は、日本でもその取り組みが始まっている。しかし、法制度や文化的背景が異なるため、日本社会では必ずしもうまく実践できていない。日本社会に合ったACPの理論的根拠と豊富な事例による、よりよいエンドオブライフ実現のための電子テキスト。
東京大学出版会

人生の最終段階までひとりひとりを尊重した医療・ケアを実現するために、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)に取り組む医療・ケア従事者が増えています。そこで本書では、日本の思想と文化的な特徴および法・制度を踏まえた日本型 ACP の考え方と実践の方法を提示しています。

本書第1部は理論編です。第2部「実践編」では総勢18名の医師・歯科医師・看護師・MSW・介護支援専門員らが14の事例について、現場でありがちな意思決定支援上のジレンマへの対応を丁寧に説明し、ACPの取り組み方と支援のあり方を具体的に解説しています。

(東京大学出版会, 2024)



臨床倫理の考え方と実践—医療・ケアチームのための事例検討法



ひとりひとりの患者や利用者に寄り添い、その意思を尊重し最高の医療・ケアをおこなうため、多職種からなる医療・ケアチームの丁寧なチーム・カンファレンスが重要となる。臨床倫理の基礎および事例を検討するメソッドや注意すべき点をわかりやすく解説し、豊富な実践ケースを収録。東京大学・東北大学ほかの研究者による臨床倫理プロジェクトが各地の医療・ケア従事者と共同で長年取り組んできた成果をまとめた、臨床現場の倫理問題に向き合う専門職のための決定版テキスト。
東京大学出版会

《臨床倫理プロジェクト》が研究開発してきた臨床倫理の理論と実践の具体的な方法論について詳述しています。同プロジェクトがスタートしたのは1980年代後半。米国でも臨床倫理が興ってきた時代に、その動きと並行しつつ、米国からの翻訳学習ではなく、日本の社会的文化的特徴を踏まえた独自の臨床倫理の考え方が、研究者と現場の医療・ケア従事者の長年にわたる協働によって形成されてきました。

本書第1部は基礎的な理論の概説編です。第2部「実践編」では、総勢16名の医師・看護師・MSWが、意思決定支援に難渋しがちなさまざまな場面の16事例について、実際に行われるカンファレンスを念頭に対応のありかたについて執筆しています。第3部はアドバンスト編です。

(東京大学出版会, 2022)

東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター

上廣死生学・応用倫理講座

Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo